第１回　社会教育委員会議　議事概要

１　議事

⑴ 報告事項

①　第３次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の実施について

⑵ 協議事項

協議テーマ「人生 100 年時代の生涯学習（2 回目）」

２　日時

令和４年(2022 年) 6 月 27 日（月）13 時 00 分～15 時 00 分

３　場所

ＳＴＶ北２条ビル６階　教育委員会Ａ・Ｂ会議室

４　出席者

⑴ 委員（出席９名）

鈴木委員、臼井委員、髙橋委員、一戸委員、中野委員、本間委員、

オンライン参加：出口委員、出葉委員、榊委員

欠席　　：安田委員

⑵ 事務局（５名）

木村生涯学習部長、村上生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、逸見推進担当係長、三津橋職員

５　開催形態

公開（マスコミ関係者１名傍聴：北海道通信社１名）

６　会議内容

⑴ 配布資料

資料１：第３次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の実施について

別紙：生涯学習に係るアンケート調査

資料２：前回会議の協議内容をまとめたもの

⑵ 報告事項

①　第３次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の実施について

ア　事務局から資料１及び別紙を用いて説明（小柳係長）

説明要旨

・アンケート調査の実施にあたり、新たに設定する質問の内容について

・構想の進捗管理及び経緯について

・令和４年度調査の実施について

・実施スケジュールについて

イ　主な意見・質疑応答

・このアンケートというのが、平成２７年以降、初めてということなのか、何年置きで行っているものなのか。また、その調査対象の５，０００人というのは、どのようにして選ばれるのか。問８の新規では、「つながり」ができましたかと聞いているが、本当に学びだけしたいと思って、つながり作りを求めていない人もいるのではないか。この視点に立つと、出来なかったという回答だった場合、その先の設問８－１にある役に立たなかったという表現の結びつきがちょっと分かりにくい。また、その他に対しての自由記述欄というのはあるのか。（髙橋委員）

→　このアンケートは、平成１７年、２２年、２７年と間隔をあけてこれまで実施をしてきている。当時、広報部の市民意識調査に混ぜ込んで生涯学習の設問について調査をした経過がある。

２点目の御質問、５，０００人ということについては、住民基本台帳からの等間隔の無作為抽出ということで前回調査でも実施しており、今回も同じ実施方法で行わなければ経年比較ができないことから、基本的には前回とやり方は同じと考えている。ただ、今回、設問が多く、市民意識調査の中で実施するということが難しいので、別途、当課でアンケート調査をやるが、調査対象者の抽出方法や範囲、郵送による調査手法等の条件は変えずに行うことを考えている。

３点目、新規の問８番の設問で、できないという回答だった場合、役に立たなかったというところの結びつきが分かりにくいというところの表現は、御指摘のとおり。満足をしていない人が問８－１に結びつくよう、もう一度見直しをしたい。自由記載欄は、今回も記載欄を設けて実施する予定。（小柳係長）

・アンケートの回収率は５５．３％だったとのことだが、アンケートが返って

きた年齢層というのは、均等に戻ってきているような状況なのか。（本間委員）

→全体で大体２，７００件少々の回答があり、カテゴリーとして２９歳以下、それから３０代、４０代、５０代、６０代、７０代以上ということで分けているが、おおむね大きな差はなく、２９歳以下が大体３００件少々だが、ほかは３０代からおよそ３８０件、４９０件、４７０件、６０代はちょっと多くて５５０件ぐらい、７０代以上が４８０件ぐらいということで、おおむねバランスのとれた回収をしている。（小柳係長）

・問８の回答の仕方がいま一つよく分からない。地域づくりの取組に参加できた、この「・」が四つほどあるが、この中から選ぶという意味なのか。それと、この問８の質問の中で、まちづくり活動、地域づくり、まちづくり活動団体とあるが、それぞれ定義づけというか、まちづくりと地域づくりは違うのかとか、まちづくり活動団体というのはどんな活動を示しているのかというのは、何か明記されているものはあるのか。この答え方と、まちづくりと地域づくりの言葉の定義などについてお答えいただきたい。（出口委員）

→回答の仕方、今の想定では、生涯学習に取り組んで、つながりづくりができた、役立ったと感じる方について、三つ目、四つ目ぐらいまでの設問から当てはまるものを選んでいただくということで想定はしていた。一方で、分かりづらいというところも、まさに御指摘のとおりなので、取り組んだ人がどれを選ぶのか、複数回答選んでいいのかとか、あと、つながりができなかった人はどれを選んだらいいのか、また、求めていない人もいるのではないかというようなことも含め、そこは整理をさせていただきたい。

２点目の、まちづくり、地域づくり、その辺の定義づけについては、残り１カ月で具体的に整理していきたいと今まさに考えているところであり、御指摘のあった、まちづくり活動はこんなものです、つながりづくりって例えばこんなものです、そこが分からなくならないようにしたい。（小柳係長）

・「できた」となると、できる、できないという意思が多少入ってくると思いますので、何か、つながったとか、意思とは関係ない言葉のほうがよろしい

と思う（鈴木委員）

・平成２７年の設問に、学習成果をどのような形で生かしたいかとある。今までだったら、学ぶということが主体になっていたが、成果というか、アウトプットか、それが大事だということなのだが、それができたかできないか、自分の学んだことが生かせたかどうかということが、問８のつながりに関わっているという回答と見ていいのか。もしそうなってくると、この問８の質問内容というのは、今回すごく大事ということと、残念ながら、平成２７年のときのその成果のところは、回答がほとんど日常生活に生かしたい、自分の人生をより豊かにしたい、自分の健康維持増進に役立てたいという、要するに、自分のためにその生涯学習を行ったみたいな回答がほとんどである。社会貢献活動に生かしたいとか、そういうところは、この平成１７年も２２年も２７年もかなり少ない数値になっているので、これが高くなることを望んでいるということであれば、問 8 の回答選択肢の設定においては、分かりやすいものを用意したほうが良いと思う。（本間委員）

・問２－２－２で、もっと利用してもらうためにとあるが、問２－２－１を見ると、最も利用した公共施設を問う設問になっている。この構成だと利用してもらうためのアイデアを募っている形だが、「自分が」利用したくなると聞きたいのであれば、また文言が変わってくる。趣旨に合わせて再考されたほうがいい。（鈴木委員）

(3) 協議事項

① 協議テーマ「人生 100 年時代の生涯学習（2 回目）」

ア 事務局から「協議資料」を用いて説明（村上課長）

説明要旨

・前回の会議では、協議テーマ「人生１００年時代の生涯学習」について、人生の各世代の特性を踏まえて、人生１００年時代を豊かに過ごし、生涯現役を実現するためには、人生のそれぞれの時期においてどのような「学び」が必要となるかという視点で、各委員の皆様からご意見をいただいた。

・資料にあるとおり、各世代において、ある程度共通した特徴的な意見を抽出し、さらに各世代を通じて重要なキーワードごとに分類した。

・幼児青少年期における「子育て家庭を孤立させない地域のつながりの必要性」というご意見を成人期においてもいただき、高齢期においては、「社会から孤立しない（つながる）学びの機会」が必要というご意見もあった。こうしたご意見を「つながりを生む学び」というキーワードで括ってまとめた。

・同様に、地域と関わる実践的な学びの必要性や学びや活動を支える存在の重要性、まちづくり活動やボランティア活動に参加すること、学びから実践につなげる工夫（仕掛け）といったご意見を、「学びから実践へ」というキーワードでまとめた。

・さらに、学ぶことの楽しさを知る、時代の変化と価値観の多様化に対応した学び、ライフサイクルの節目に対応した学び、時代の変化に対応した学びや新たな興味関心を引き出す学びの必要性といったご意見を、「学びの工夫」というキーワードでまとめた。

・これからの議論では、この三つのキーワード、「つながりを生む学び」、「学びから実践へ」「学びの工夫」、この三つの論点で御議論をいただきたい。

イ　主な意見・質疑応答

・高齢者のデジタルデバイドの対策がやっぱり大事。実際にコロナもあって、巣ごもり生活的な中で何かを学ぼうとしたときに、このような形でリモートみたいなのがここで一気に普及してきて、当然、教育委員会だったりいろいろな民間企業の与える側は、提供している側はＩＣＴ化をすごく進めて、こういうのをリモートで見れます、インターネットで見れますと教えてくれるが、受け取るほうの、特に高齢者とか子育て世代は、外へ行くにしても何かするにしてもできないという方々がかなり厳しい状況にある。そういう方々を何かの形で救ってあげないと、ここでもうあきらめてしまう人がいる。そのデジタルデバイド対策というのは大切。（本間委員）

・私が行っている児童会館で、子育てサロンというのがあって、２歳ぐらいまでのお子さん連れで来ているお母さんたちが集まるところがあり、遊ばせに来ている。たまたまそこで保健婦さんが、発熱のことか何かのお話をしたときに、すごく皆さん興味を持っていらして、児童会館ってそういうふうにお母さんが

お子さんを連れてきたときに、何か学んだりする場所としてすごく使えるのではないかなと感じた。あと、まちづくりセンターが、いろいろなものに使われているようなので、集まる方たちに働きかけるのも、何か興味を持つきっかけになるのではないか。

私もデジタル化が一番。本当にデジタル化についていけない典型人間なので、やっぱりそういうことをこれから推進していかなければ、取り残される年寄りがいっぱいいるのではないかと感じている。（髙橋委員）

・最近、情報化とか、そういったものが急速に進展しており、生活の中に否が応でも入ってきているので、デジタルデバイドが大きなカギになってくるのではないか。やはり興味を持つことが非常に重要。高齢者の方も情報化、デジタル化に対して苦手意識を持っている方は、何かきっかけがないとなかなか難しいと思う。そういった中で、よく聞くことは、例えば、お孫さんとのやりとりとかに、ＳＮＳを使ってつながることによって、お孫さんと会話ができ、何かこういう会話を楽しむような形になると、やっぱり自分でどんどん教えてくれということで、お孫さんと子どもたちとつながるとか、何かそういう目的とか、楽しみがあると、比較的覚えやすくなるのかなと思っている。

コロナになる前の２０１９年にエストニアに視察で行った際に、あそこは電子立国と呼ばれていて、皆さんすごく使いこなしている。どうしてここまで普及したのかと聞いたところ、生活が便利になるというものを打ち出して、最初は抵抗感が結構あったらしいが、それで急速に普及したという話をされていた。やはりそういった目的というか、その辺の先が見えて使う機会がふえてくると、慣れる速度も速くなるのかなと思っている。そういった中で、学びの機会や世代間交流とかの機会をこの生涯学習の中で提供していくことによって、全体的に慣れていくということが非常に重要なのではないか。（鈴木委員）

・そもそも生涯学習に、まちづくりとか、そのつながりを、結果や成果として結びつけることにちょっと違和感がある。まず、自分が学びたいものを学ぶ、そこで完結しても基本的にいいのかなと。その結果として、その先にまちづくりとかつながりって必然的についてくるのではないかなというのがある。なので、アンケートにもあったが、個人的に勉強して、まちづくりにつながりましたかって聞かれても、まちづくりのために僕やっているんじゃないんだけどと

いう人が実は、ほとんどではないかなと考えている。

それと、デジタルのほうの私の感想として、学校現場は社会よりもっと先に行こうとしているという印象があって、具体的に言うと、もうデジタル教科書が使われる。１人１台の端末はもう持って帰ってきているし、これがデジタル教科書になると、端末一つで全ての教育ができるようになる。それはそれで多分いい方向なのだと思うが、我々保護者がついていっていないというのが正直なところ。それについていく我々大人のスキルアップが求められているのだなということを感じて、実はうちのＰＴＡの協議会では、そこを一生懸命広報しようとしているというところ。（中野委員）

・行政側からすると、学びの成果をいかに生かす場をつくっていくのかというのが大事なことだろうと思う。だから、立場によって、学ぶ人たちは、決してそこまで発想していなくても当然のことだと思うが、行政側として、その学んだ成果を生かすということはやっぱり大事な施策だと思っている。

それで、この「学びから実践へ」ということを進めていくに当たって、いろいろ学んだ人たちが、ボランティアに関する基礎的な知識というのは持っているのかというところをつくづく感じている。ボランティア論というのはいろいろ活動の四原則とか基本的な考え方というのはあると思うが、それを分かった上で地域づくりの活動なんかに取り組んでいるのかというところにいつも疑問符を持っていた。やっぱり人に関わる、人に奉仕というか、人の活動を支えることによって自分たちもやりがいを感じるんだよということを知っているかどうかということ。その辺のそもそも論ということを多くの人に知ってもらいたいなとつくづく思っている。そこをきちんと多くの人に知ってもらうことによって、実際の実践活動につながっていくのではないかなと思っており、そういう場をどうにか作れないかなというふうに考えている。

もう一つが、地域活動とかボランティア活動、やりたいとは思うけれども、どこに行ったらできるのだろうかということについても、やっぱり分からない人たちがたくさんいるのではないかと思うので、札幌市社会福祉協議会がボランティア活動センターとして取り組んでおられるそうだが、ここはあくまでも福祉の分野だと思う。それ以外の活動なんかも実際はあろうかと思うので、もっと広い意味のボランティアセンターとかコーディネーターの存在というも

のがないと、なかなか実践的な取組に広がっていかないと思う。（出口委員）

・学ぶ意欲がある人たち、住民がふえることで、まち全体が成熟していくというイメージの話し合いのスタートだったかなと感じていた。先ほど髙橋委員が発言されたように、児童館は子育て中の方とかが集まったり、子育て家庭というところはすごくいろいろな場面で展開できるのかなと思っていた。

　先日、ずっと子育てしていて、専業主婦で小さいお子さん育てた方が、バイトを始めるといったときに、何か、ついに社会復帰だねということを言った方がいてすごくびっくりした。子育てしている家庭も社会なのに、ああ、まだまだ働くことが社会復帰という感覚があるんだなというところを感じた。

　大学で幼児教育学科がプレイパークというのを主催しているところが結構ある。そこに親子で遊びに来たりとか、そこでいろいろ学生も勉強になるし、親子の方も遊べる、遊びの機会が今、場所がないので、自然で遊ぶ、森で遊ぶ、親子、母子だけでは難しいようなところを学生さんが企画したりするのもたくさんある。これを、学び合いという視点で高齢者の方に置き換えて考えたときに、学生さんにはすごく今、人の役に立ちたいという若い子たちが、想像以上にいるので、介護学科の方が企画をしてスマホの使い方を通して学び合うとか、そういう力も借りながら学び合いができたらいいと最近感じている。（一戸委員）

・生涯学習の中で、どうも学びをいまひとつ身近に感じない人は何でだろうというところを感じており、学びの中に、きちんとやろうとか、成功しようとか、何かそういうニュアンスがあって、うまくやっていくみたいなところがあって、それで嫌になってしまうのかなというようなことを思っている。もっと何か、いろいろな人がいろいろな形で失敗を楽しんだり歓迎したりするところから、何か新しいアイデアとかが出てくるのかなと思って、学びとか、生涯学習も何か正解を追い求めていくような流れが全体にあるような気がしており、そこが多分、いまひとつ普通の人たちが面白がれないネックになっていると常々感じている。くだらないことも含めて、どんどんアイデアとして出していけるようなことが学習なのだという、言ってみれば概念を広げていくようなことができると、それぞれのキーワードにどのような工夫が必要かというときに、いろいろな失敗を楽しんでいくような空気、そこができれば、先ほどから話題に

なっているデジタルデバイドも、もう少しどんどん失敗をして成長していくような空気をつくっていければいいと感じている。（臼井委員）

・学びを実践する場の提供の工夫とあるが、札幌市交流プラザ「ｈｉｔａｒｕ」というすごく立派な施設で、劇場があって、図書館みたいな。自分たちが好きなところで学ぶようなテーブルとかがあって、ガラス張りで、太陽も当たって、こんな施設が札幌にあるんだということを改めて気がついた。多分、家の中でひとりで座っていたら見つけられない場所。調べる本もあります、どうぞ皆さん、ここへ来ていろいろな人と交流して、自分が学んだことを、いろいろな人と触れ合って、自分がやってきたことで、先ほどのまちづくりのボランティアみたいな話など、それにも僕、参加できるのではないかみたいな、気づける施設、そこへ来てください、いろいろな情報がありますよという場所が、もしかしたら生涯学習のこれからの施設や場として提供するのにはいいのかなと思った。生涯学習の観点から、市内のこのような施設が全部一括してつながっているようになればいいと思う。（本間委員）

→図書館部分については中央図書館の一セクションという形。あの建物自体は札幌市の出資団体が管理しているが、市役所の組織的に言うと、市民文化局というところが全体をコーディネートしている。劇場が中心の施設ではあるが、今お話があったように、いろいろ確かに可能性はある施設、図書館も一緒になっているので、生涯学習的な視点もあると思う。（木村部長）

・私も、図書情報センターを見学させていただいたが、あそこは、いろいろな仕掛けをしている。比較的オフィス街にあるので、そういった方たちをターゲットに、そういった本のラインナップや、蔵書なんかも工夫が凝らされているし、カフェもあって、少しお茶を飲みながらゆったり本を読んだりとか、様々な工夫といろいろな仕掛けの中で、気軽に来やすくするとか、やはり、どこかに行くというのは、ある程度の抵抗はあるので、入りやすい雰囲気というか、そういうものが場としては重要になってくると思う。（鈴木委員）

・場の提供というところで、もっと活用できるなと思ったのが、数多くの学校が持っている学校開放図書館というのがあり、実は地域の方々がよく来る。そうすると、子どもと地域の人の接点も生まれているし、例えばクリスマス会をやりますよとか、そういったときにも地域の人とお子さんと一緒にやるというよ

うなことができている。例えば、「ｈｉｔａｒｕ」もいいし、「ちえりあ」もいいし、札幌市は大きいので、やっぱりその地域地域に核となるそういう施設ということを求めると、学校をもっと利用できれば、体育館とかも夜に使っているし、もっと使えるのではないかなと思った。（中野委員）

・私自身が子育て中に、とても勉強したいと思っているときに、むくどりホームの２階でお子さんの託児をボランティアの方にお願いして、下の居間のようなところで、１５回ぐらいにわたって、カナダの子育てテキスト「Nobody's Perfect」を読みながら、自分の子育てが何でつらいのかというのを子育て中の当事者のお母さん方と話した。この託児つきの学習会なんかは結構歴史が深くて、１９８０年代の国立市の公民館の実践事例でもあり、子育て中の家庭を孤立させない工夫の一つかなと考えている。また、失敗の中からヒントがあるとか、失敗をリソースにするということについて、できない自分とか、失敗とか、そういうことを明るく楽しく話せるような、そして、そのできないこととか失敗みたいなことを共有することによって、私だけじゃないんだというのが一つキーワードになるのかなと思った。この幼児青少年期、成人期、そして、高齢期というふうに人生のステージを三つに分けているが、それぞれの人生のステージの方々から何か学べることがあるのではないかなと考えて、並列になっているそのものを、循環するような、つなげるようなことを、仕掛けとして考えてみるのはいかがかなと考えていた。（榊委員）

・地方で、公民館が中心で、講座もいろいろなのをやっていた。そこで年に一回、題名は「行ってみよう、やってみよう」という社会教育委員会主催の行事が必ずあって、そこでいろいろなことを体験して学んでいくというのがあった。やっぱりそこから興味を持って、何か習いだす人がいたり、お年寄りとの触れ合いもあって、私なりには、何かを学んで何かをしようという以前に、生涯学習ってイコール生きがいを持つということなのではないか。やっぱり、生きている価値の中に、何かをするということが大事なのかなと思う。まずは、自分のために何か学んで、人のために役立とうとか役立てていこう、何か生かしたいかなというふうに派生していくものなのではないか。取っかかりとか、何か学ぶ場所とか、分からないところもあるので、学ぶって人それぞれで年代でも全然違うと思うので、なかなか、共通して考えるのは難しいと思う。（髙

橋委員）

・工夫というところにつながるのかなと思うが、まず、やっぱりきっかけが要ると思う。「ちえりあ」によく行くが、いろいろなカルチャー教室などをやっている。また、各区民センターに結構、壁に、何々教室、何々探検会とか、いっぱい紙貼ってあって、あれがまさしく「ちえりあ」でやっていたことの各区版だと思う。それに、学校開放とか学校開放図書館、それに、閉校を利用した施設、たくさんあると思う。やっぱり地域の方々がいろいろと企画、イベントとしてやっていると思うのだが、これを総合的に検索できるシステムってないのかなというのを感じる。結局、ホームページで探しても、そこがどういう活動しているかというのは、実際、中に入っていかないと分からない。デジタルを活用して、札幌市で行える全てのこういったカルチャースクールも含めた生涯学習につながるものを検索できるシステムって要るのではないかなと思う。せっかく自分が何かやってみたいという気持ちになったときに、探し方が分からないという状況があるのではないかなと感じた（中野委員）

・デジタルというところでは、やっぱりハイブリッド形式がすごくいいのではないのかと思っている。お互いネットでも参加できたり、全国の研修が受けられるようになって、すごく今、このコロナ禍のメリットというか価値観も広がって、今までずっと札幌に住んでいたが何か違うところで働いてみたいな気持ちも初めて出ていて、世界が広がっている。大切なことは、うまく組み合わせていくということ。「OriHime」（オリヒメ）というロボットを活用して、重症心身の寝たきりの方でも、遠く離れた場所にあるカフェでお仕事に参加できるなどという例もある。いろいろと組み合わせながら工夫していくというのはとてもいいと思った。（一戸委員）

・デジタルデバイドの話があり、学校現場では、ここ二、三年、コロナ禍によって急激にＩＣＴ環境が推進されて、子どもたちにタブレット端末が供与されて、持ち帰るということも日常化しているし、コロナによる出席停止や学級閉鎖時に、自宅から学習、学校の担任の先生や級友、クラスメイトとつながって学習をするというようなことも急激に日常化した。一方で、このデジタルデバイドの問題は、この普及の過程でもあり、家庭におけるＩＣＴ環境というかパソコンの通信状況というのは、かなりばらつきがあったので、端末を１人１台

貸与しても、家庭でできるかどうかというような問題が立ちはだかった。ここでセーフティネットがかかって、Ｗｉ－Ｆｉルーターの貸出しなども行って、必ずしも自宅で環境が整っていない子どもに対してもサポートできるような体制もできている状況。一方、これを生涯教育というか社会全体で考えると、かなりデバイドは進んでいて、そこに乗り切れていない方々にどういうふうにセーフティネットをかけるかということがこれからの命題なのだろうと思う。例えば、生涯学習のための情報の検索というようなお話もあったが、できるだけ情報に乗れる幅を広げるための環境や機器、状況の工夫というのがどうしても必要なのだろうなと思った。

子どもたちに、学びたいという気持ちを持たせて学び進めることが、ひいては社会のためになるということなので、冒頭であったように、生涯学習の意味合いも、自己の実現であるとか、長く学び続けたいと思うことが人のつながりにつながったり、ひいては社会につながっていくというようなことで、そこは目標として一致するようで、実は２段階になっているというような議論があったのは、なるほどそのとおりだなと思ってお聞きしていた。（出葉委員）

・先ほどからいろいろ意見が出ているように、何か、きっかけと楽しさがあって、その中で、結果的に学びにつながっていくというか、そういう何か仕掛けというか、そういった場があると、非常によろしいのかなというふうに改めて思っていたところ。（鈴木委員）

・どれだけデジタルデバイドをなくしていくかは、やっぱりデジタルがどれだけメリットがあるかというのをどれだけ知らせていくかということになると思う。もういろいろなものがインターネットにつながっていて、例えば、子どもたちに、スマートウォッチをずっとつけて、それでスマホと同調させていったら、どんなときに動悸が激しくて、ということは、これがひょっとしたら、いじめに遭っている子は、この時間帯にこれだけ動悸が激しいというのは、そのときにみんな何をしていたかとか、そういったことが分かったりするということもあるのかなと思ったりして、デジタルの、うまい暮らしの中での使い方みたいなものがどんどん見えてくると、必然的に使うようなメリットが多くなればなるほど、人は使うようになるのではないか。今のお年寄りの方々もデジタルでどれだけのメリットがあるかというところをうまく伝えていけると、結局

は、どんなに高齢の方々も、自分たちにメリットがあれば、そこに使っていくというところがあるので、ぜひ、これだけのメリットがあるのだということが、より広く知られていくといいと大変今思っている。（臼井委員）

次回の協議事項について

・議論が出尽くしていないようでしたら、次回も人生１００年時代ということで、いろいろなステージもございますし、いろいろな多様な視点がございますので、また少し深掘りしていくということでもよろしいかなというふうに思っていました。一方で、一定程度議論が行われたという事であれば、次回に向けては全く異なる議題としてもいいように感じております。（鈴木委員）

・このボランティア活動やまちづくり活動につながる学び、ここって具体的にどういうものなのだろう、具体的にこれをやるためには、では、どういう活動がこれに当たるのだろうというのを知りたいなと感じた。（中野委員）

・本日、アンケートのところで、そういった学びの機会が、その先にまちづくりとかボランティアがあってという話も出ていたが、その辺のつながりのところは、確かにもうちょっと深掘りしてもいいのかなと思っている。ボランティアにも様々なものがあるし、まちづくりも、本当に様々なものがあるので、そういった中で、生涯学習との関わりの中でどう結びついていくのかとか、どう結びつけていけばいいのかということを議論してもいいと思っていた。（鈴木委員）

・子育て家庭を孤立させない学びの工夫ということで、児童虐待とか、いろいろ問題を起こす家庭こそが孤立しているかと思う。いい親に対する教育というのはいろいろやられているが、子育てに関心のない家庭の人たちをどう関心を持たせるか、だから、１０、５、０と例えたときに、５を１０に上げるというのはいろいろやられていると思うのだけれども、０、１を、少なくとも５に上げるだとか、そういった取組というのがなかなかなされていない、それから、そういう家庭にどうやって入り込んでいくのかというのは確かに難しい話。青少年教育にしても、野外活動に関心を持っている子どもたちに、もっとやろうねと言って、それを上げるという取組はいろいろされているが、非行に走る子どもたちを、野外教育、楽しいよねということを伝えるに至るまでは難しくて、福祉とすごく密接な関係にあると思うが、それも何か学びのきっかけによって取り組むことができる

のかなと。だから、福祉との境目って余りなくて、一緒になって取り組むべき話なのかなというふうに思っていて、逆に、福祉側がどんな取組を、０を５に上げるとか、３に上げるとかっていう取組をどれだけやっているのかというところも知ってみたいなと思った。（出口委員）

・やはり無関心層にどう興味を持っていただいて学んでいただくかということが、まだ難しいところで、きっかけをつくって関心を持っていただいてということでもあるが、そういった無関心の方々もどう巻き込んでいくかといったところが非常に重要になってくると思う。

　次回は、二つの論点で一つは、ボランティア活動やまちづくり活動につながる学びの工夫のところ、また、これは子育てに限らなくてもいいかなとは今思ったが、子育て家庭を孤立させない学びの工夫、無関心層というか、そういった方々にどう働きかけをしていくのかということをキーワードに、また御意見をいただきたい。（鈴木委員）

7　連絡事項

次回会議は、１０月から１１月月頃を予定。詳細は後日連絡する。（逸見係長）